

こども みらい 風物詩

遠い昔から毎年正月の十四日に行われている

『やっっちゃごや』。

地区の子供たちは、新年早々から作り始めた

小屋の中で甘茶を飲みながら

いろんな話をして過ごす。

そして最終日の十四日の晩、

大勢の人が集まり大いにぎわい、

やがて小屋に火がつけられると、

白い息を吐きながら、天まで焦がす

ひとすじの炎をみつめる。

子供たちは祈る。

よい事がたくさんありますように。

みんな仲良く、安堵あんどの日々が送れますように。

村の新たな一年が

ここから始まるうとしている。



正月14日の『やっっちゃごや』の夜



W i n t e r



木枯らしが頬をなでても、子どもたちの躍動はかわらない。頬を赤く染めて、冷たく澄んだ外気を深呼吸しながら、青空にむかって飛び跳ねる。身体の中で波打つ若い生命を楽しんでるかのよう。

家々の軒先に干し柿や凍み大根が並ぶこの季節、夕暮れ時の家族と過ごすひとときは、心が育つ時間帯だ。家族の絆をつよめてくれるし、思いやりの心も育ててくれる。文明を過信かじんしすぎている現代人が今一度、見つめ直さなければいけない人との繋がりつなや触れふ合いの大切さをこの村の人々は知っている。そして、冷たい冬の風の中でも、やがて来るあたたかな春に新しい芽がふくらもうと準備していることも、みんな知っている。



玉川村歴史の小径探訪



永承六年(1051)、この地を治めた石川氏の始祖、源有光が石清水八幡宮を勧請したものといわれ、石川郡の他にも広く社嶺を有した古社。

静寂さを秘めた深い歴史、
時の陰影へタイムスリップ。

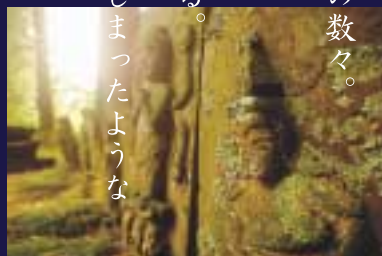
玉川村に残る、由緒ある歴史的遺産の数々。

それらは新しく変貌する村の随所に、

いまなお深い時間と流れを刻み続ける。

そこに居ると時の迷路に迷い込んでしまったような

錯覚を覚えてしまう…。



緑の中に佇む古社「川辺八幡神社本殿」

玉川南工業団地から国道118号を石川方面に向かう途中にひっそりと佇む川辺八幡神社。小高い緑の丘の上に建つ江戸時代初期の建造物で、平成5・7年にわたり、県重要文化財として修復工事が行われた本殿は、永くこの周辺を治め

ていた石川氏の氏神として、広く信仰を集められてきた由緒ある古社です。

現在は、保存のため端垣で囲まれているが、屋根を支える端正で見事な桁の彫刻などは、見るものを圧巻する美しさです。主材に頑強な栗の木を使い、建築様式は太い木割りを用いた豪壮な江戸初期の造りで、寛文・享保などの改造を経て今日に至っていることが現存する六枚の棟札からわかります。「奉棟札正八幡宮武運長久祈慶長四巳亥十月」の棟札写しからみて、慶長年間の建立ではないかと推察されています。また、内陣天井裏に南北朝期の貴重な古文書が隠されていたり、源頼朝の大蛇退治を加護した伝説など歴史浪漫を感じさせる話が残っており、境内はタイムスリップしたような静寂さに包まれています。



優れた石造美術や古墳群

阿武隈川の流域に含まれる丘陵地帯や盆地が交互に連なる地形の中通り地区に位置する玉川村には、地域性を反映した濃厚な石造美術、多くの石仏・板居碑などが広く点在し、それは阿弥陀浄土信仰が庶民の生活に強く根ざっていたことを意味します。

白華山巖峯寺参道にある国指定重要文化財「源基光の石造五輪塔」は密教教理の五大思想である空・風・火・水・地を石で立体的に形作り、方形の地輪（基礎）・円形の水輪（塔身）・三角形の火輪（笠）・半月形の風輪（請花）・団形の空輪（宝珠）より構成されています。基石、塔身、笠屋根のみがその面影を残していますが、その威風堂々とした姿は荘厳で神々しく侵食はしていても、石川一族の栄華をいまに伝えるものがあります。

東福寺は、東国布教僧・徳一上人の開基で日本三薬師として名高い古刹です。同寺の境内には、三十年に一度しか公開されない薬師如来像や鎌倉時代に造られた県重要文化財に指定されている十二神将を安置しています。

また、舍利石塔は、宝珠露盤を置いた屋蓋と塔身、台座で構成され、正面は石扉造りで高さ百八センチメートルの大きさ。周りには弥勒浄土の49院の名が刻まれ、龕内部の中央に孔穴があり、そこに舍利（骨）を納めるようになっていて、大日如来像でふさがれるようになっています。鎌倉時代の弥勒浄土往來の思想を現在に伝える稀少価値のある石造物として、昭和10年に国の史跡に指定されています。

平成9年から本格的に発掘調査が行わ



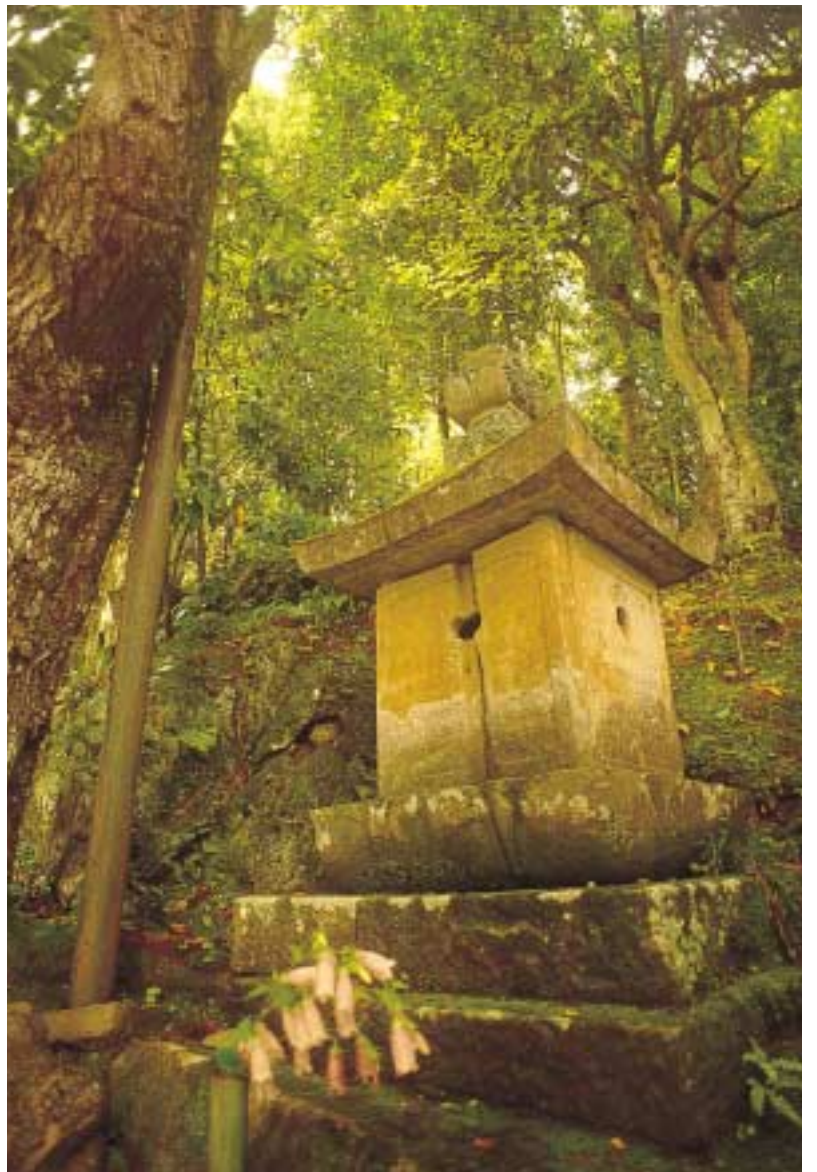
小高字江平地内の沢地から出土した木簡は、聖武天皇が発した仏教令が当地にまで伝わったことを証明する貴重な資料として高い評価を受ける発見となった。

れた江平遺跡は、縄文時代晩期から奈良・平安、中世に至るまでの各種遺跡が発見された複合遺跡で、阿武隈川流域の歴史を解明するうえで注目されています。とくに奈良時代の歴史資料として出土した木簡は天平15年正月の聖武天皇詔に関する資料として全国的に大きな話題を集めました。

この他にも、約5万㎡の広大な敷地からは木製の桶や鋤身、金属製の紡錘などが見つかり、当時の生活を裏づける貴重な発見となりました。



藤原時代末に領主源基光の墓として建立された五輪塔。仏教美術史上貴重な財産として巖峯寺参道の老杉傍らの覆堂に安置されている。



緑の苔むす東福寺境内にある舍利石塔。元久二年乙丑・当地の開山和尚の舍利が安置されていた。弥勒浄土往來の思想を表現している。

